



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

「ナルマダー河の子供たち」④

マーンダター島巡礼の出発点は、何と言ってもマーンダター寺院である。インド12リングの一つである。リングは男性性器を指す。シンボルの意味もある。リングそれ自体がシヴァ神なのである。シヴァ神を知らない人は、不動明王だと思って差し支えない。

寺院の本尊として小さなリングが祀られている。小さいけれどもパワーがある。昔巡礼者は河を渡って参詣に来た。天候不順で増水すると婦女子は渡れない。

伝説では哲人シャンカラも南インドからやって来たが洪水のため渡れず、対岸で祭祀を執行了たと云われている。そこにママレーシュワル寺院が建てられた。

シャンカラはシヴァ神の化身だとされている。彼の師ゴービンド・パーダは、シャンカラがこの世に出現するまで、千年の長き間洞窟で瞑想して待っていた。シャンカラが訪れると、哲学的教えを授けた。その洞窟の上にマーンダター寺院が建てられた。

寺院の上には、この地方を収めていた藩王のパレスがある。この島は強固な要塞でもあった。島を鳥瞰するとオームの文字に見える。また、五体投地する信仰者の姿にも似ている。合掌して地に臥す姿である。両手を合わせたところが、下流のトリヴェニー・ガート（両川の合流地点）である。ここで沐浴するのが最も神聖な行為である。

われらも右回りに巡礼することになった。スワミーが案内役につけてくれたのが、ゴーパル少年である。成人したら、きっとハンサムになると思われる美貌である。われらは左岸を下流に向かいガートに至ったが、水流が少なく沐浴できる状態ではなかった。諦めて右岸を上流に向かって歩いていった。途中人の身長ほどもある大猿に餌をやっているスワミーに出会った。いつも餌を与えているので猿もなついている。彼は助っ人スワミーである。スワミーとOB青年だけで、われらと子どもたちの食事を賄うことができない。それで助っ人に入ったというわけである。島の上部に彼自身の質素なアシュラムをもっている。もともとは茶の名産地ダージリンで旅行会社に勤めていたが、どういふ理由か出家したという。案内に長けているので、巡礼の先達になってもらった。

島の高台には、巨大なシヴァ神像がある。助っ人スワミーが苦笑いしながら呟いた。

「なんのために、このような巨大な像を建てたのだろうか」

ほぼ一周しマーンダター寺院近くで、ゴーパルのお婆ちゃんにあった。次いで母親と弟に出会った。彼の自宅は島内にあることが分かった。

(家族は貧しく見えないのに、なぜ彼はアシュラムに寄宿しているの?)

おそらく大家族のため、教育上の問題で、スワミーに預けているのだろう。

巡礼の終盤にさしかかったところで、村人が騒いでいた。毒ヘビだ。緑色をした綺麗なヘビである。以前にヘビに噛まれた修行者がいた。救急車でインドールに運ばれ集中治療室で治療を受け助かったそうである。

誰がそのヘビを殺すのか、と見ていたら誰も殺さない。

助っ人スワミーは杖でそっと巡礼路の脇においやった。修行者は殺生をしない。

それなら、他の村人が殺すのか、と見ていたら誰も殺さない。

(噛まれたら、誰かが死ぬかもしれないではないか)

わが輩の足元には毒ヘビがいる。それならわが輩が大石でグシャと潰してやろう。辺りを見回して誰もいなくなればグシャとやってやる。わが輩の心に邪心が生じた瞬間である。わが輩の邪心は正義だと思った一瞬である。それは“聖なる邪心”だと思った。

しかし、わが輩は行動に移さなかった。ここは聖地だからである。

われら一行は、スワミーに一宿一飯の恩義のお布施をした。布施は、インドでは極めて常識的な行為である。ところがスワミーは大雑把なのか、お布施袋を屋外のテーブルに置きっぱなしにしていた。全くの無頓着か、それとも人を信じているか。

(盗られても知らないよ。だけど何となく心配)

わが輩の取り越し苦労が事実となった。やはり、お布施が消えてしまった。

アシュラムには、助っ人スワミーと白装束のブラフマチャリー(見習い僧)がいた。当初わが輩は、見習い僧はスワミーの弟子かと思っていた。最年少の子どもたちはスワミーの部屋で寝起きしているが、そこで見習い僧が勉強の手助けをしているのを見たからである。彼は清楚な身なりで物静かな雰囲気があった。

スワミーはまたも自室の机上に無造作に布施袋を置いていた。そこに出入りできるのは見習い僧と子どもたちでだけである。

(誰が盗ったのか、子どもたちか?)

子どもには“純粋な邪心”がある。だが、子どもが盗ったのなら悲しい。

お金は袋ごとなくなったのではない。その内の1,000ルピー札5枚のみ抜き取られていた。この芸当は“純粋”な最年少の子どもにはできない。

(誰が盗ったのか?)

誰も犯人を追及しない。わが輩だけが疑心暗鬼に陥った。わが輩の目だけが見習い僧の顔を凝視してしまう。昨日まで清楚に見えていたものが、濁った白衣に見える。しかし決定的な証拠があるわけではない。

彼は弟子ではなく巡礼者であった。彼が平然と去る時、なんと皆は快く見送った。

(彼奴は、神さまの賜物だと思っているのか。くっそ!)

残されたものは、わが輩の不愉快な疑心だけである。それから、どのようにすれば解放されるのか。

そこであるものを丁夫人に託した。わが輩たちが去ったあと、スワミーに渡してほしいと。これを為したあと、わが輩の心は静寂に戻った。彼の“聖なる邪心”の残像が消えた。中身は1,000ルピー札5枚である。

全額ちよろまかさなかった“善行”により、かれの神は彼を容赦した。

疑心暗鬼に陥ったわが輩には、再び子どもたちの“笑顔の恩恵”を与えてくれた。